Extramammary Paget's Disease

左腋窩に局限した extramammary Paget's disease

山田 康博* 濱田 重雄* 大森 房之*
嵯峨 賢次* 神保 孝一*

Extramammary Paget's Disease restricted to the Left Axilla

Yasuhiro YAMADA *, Shigeo HAMADA *, Fusayuki OMORI *, Kenji SAGA *,
Kouichi JIMBOU *

* Department of Dermatology, Sapporo Medical University

We report 75-year-old man with extramammary Paget's disease restricted to the left axilla. He had an egg-sized erythematous plaque with scale and erosion. Histopathologically, Paget's cells were found in the epidermis and neither dermal invasion or intradermal carcinoma was found. Immunohistochemical examination revealed that the Paget's cells were positive for CEA and EMA, and negative for GCDPF-15 and HMFG-1. We compared this case immunohistochemically with five cases of extramammary Paget's disease which were treated in our department, but there was no specific pattern of reactivity to the above mentioned antibodies. [*Skin Cancer (Japan)* 2002; 17: 101-103]

Key words : Extramammary Paget's disease, Axilla, GCDPF-15

はじめに

Extramammary Paget's disease (以下 EMPD と略す) の多くは外陰部に好発し、時に double あるいは triple Paget's disease として腋窩に同時に発生したという報告も多い。今回我々は稀と思われる腋窩に局限した EMPD を経験し、過去に当科で経験した EMPD 5 例と免疫組織学的に比較検討行ったので報告する。

症 例

患 者：75 歳，男性

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：前立腺癌

現病歴：5 年前より左腋窩に湿疹様病変を認め、市販の外用薬にて治療していたが皮疹は改善せずに経過していた。前立腺癌のため入院していた当院泌尿器科より紹介され、平成 12 年 5 月 10 日当科受診した。

現 症：左腋窩に境界不明瞭な鶏卵大の鱗屑・びらんを伴う紅斑性局面を認めた。皮下に浸潤・硬結はなく、腋下リンパ節は触知しない

* 札幌医科大学皮膚科学講座

(図1)。

治 療：皮疹部からの生検の結果，組織学的に EMPD と診断し，病変部より 2cm 離し脂肪層中層の深さで切除を行い，分層植皮術を施行した。また Occult Paget's Disease の検索のため，対側の腋窩 1 ヲ所および陰囊の無疹部 2 ヲ所より皮膚生検を施行した。

病理組織学的所見：表皮では不全角化を認め，表皮内には類円形の大型の核をもった胞体が淡く好酸性に染まる腫瘍細胞を多数認める。基底膜は保たれており，真皮の上層には稠密なリンパ球浸潤を伴っている(図2)。真皮内への腫瘍細胞の浸潤はなく，また下床に浸潤癌等も認めていない。腫瘍細胞はジアスターゼ抵抗性 PAS 染色陽性，アルシアンブルー染色陽性を示した。

対側腋窩および陰囊の無疹部からは腫瘍細胞

を認めなかった。

免疫組織学的所見：各種抗体を用いて腫瘍細胞の染色を行い，全腫瘍細胞における陽性細胞の割合により 20~40% 程度陽性を(+)，80% 以上陽性を(++)，ほとんど染まっていないものを(-)として評価した。図3にその結果を示す。

考 察

EMPD は通常外陰部に発生する場合が多く，次いで腋窩，肛囲などに多いとされている¹⁾。しかし腋窩にみられた場合は外陰にも併発した double あるいは triple Paget's disease としての報告が多く^{2)~4)}，腋窩単独の発生例は稀と考えられた。また EMPD は Occult Paget's Disease として無疹部にも腫瘍細胞を認める場合がある事も知られているが⁵⁾，自験例では対側の腋窩

図1．初診時臨床像

		CEA	EMA	GCDFP-15	HMG-1
自験例(男)	左腋窩	++	+	-	-
症例1(女)	陰部	++	++	++	+
	右腋窩	++	+	++	+
	左腋窩	++	+	++	+
症例2(女)	肛囲	++	+	+	-
症例3(男)	陰部	++	+	++	-
症例4(男)	陰部	++	++	+	-
症例5(男)	陰部	++	++	-	-

図3．免疫染色

図2．病理組織像(H.E.染色)

- a：弱拡大像．基底層は保たれており真皮の上層に稠密なリンパ球浸潤を認める
b：強拡大像．表皮内に類円形の大型の核をもった胞体が淡く好酸性に染まる Paget's 細胞を多数認める

や陰囊の無疹部からの皮膚生検でも組織学的に腫瘍細胞を認めておらず、組織学的な観点からも腫瘍が左腋窩に局限していたといえる。

そこで、腋窩単独に発生した自験例の特異性をみるために、過去に当科で経験した両側腋窩と外陰部に発生した triple EMPD 1 例 (症例 1)、肛囲に発生した 1 例 (症例 2)、外陰部に発生した 3 例 (症例 3, 4, 5) の計 6 例 8 病変について免疫染色 (CEA, EMA, HMFG-1, GCDFP-15) を行い組織学的に比較検討を行った。

HMFG-1 はアポクリン腺に特異的に染色性を示すモノクローナル抗体とされており、また GCDFP-15 は乳房のアポクリン腺由来とされる gross cystic disease の嚢腫より抽出された糖蛋白の一つであり、アポクリン腺に染色性を示すことから Paget's 細胞のマーカーになり得ると考えられている⁶⁾。

図 3 に示すように CEA, EMA では EMPD における従来の報告どおり全例で陽性を示した。しかし HMFG-1 に関しては症例 1 でのみ軽度陽性を示し、GCDFP-15 に関しては各症例により染色性はかなりばらつきがあるといえた。

今回の染色結果からは腋窩単独に発生した自験例の染色態度は従来報告されている EMPD とは特に差異はなく、発生部位による特異性は見い出せなかった。しかし、HMFG-1 や GCDFP-15 における染色結果に関しては症例により染色性にばらつきがあり興味深い結果となった。

すなわち、現在では Paget's 細胞がアポクリン汗腺方向への分化を示すことは大方の意見の一致するところであるが、アポクリン汗腺に染色性を示す HMFG-1 や GCDFP-15 において一致した染色性を示さないということは、Paget's 細胞が多様な抗原性を有していると推察される。また GCDFP-15 が Paget's 細胞のマーカーとして有用であるという報告もされているが、過去の報告では陰性例もいくつかみられている⁵⁾⁷⁾。今回の染色結果を合わせて考えると Paget's 細胞のマーカーとしての有用性は疑問の残るところであり、今後症例数を増やしての検討が必要と考えられた。

文 献

- 1) 大原國章, 他: 乳房外 Paget 病の診断と治療. Skin Cancer, 8: 187-208, 1993.
- 2) 鹿島真人, 他: 腋窩 Paget 病の 1 例. 皮膚臨床, 27: 311-316, 1985.
- 3) 高槻寛, 他: 両側腋窩 Paget 病を伴った外陰 Paget 病の 1 例. 臨皮, 42: 397-401, 1988.
- 4) 大草康弘, 他: 両側腋窩 Paget 病. 臨皮, 43: 281-284, 1989.
- 5) 斎藤浩: 乳房外パジェット病患者における腋窩および乳頭無疹部の組織学的検討. 日皮会誌, 105: 147-151, 1995.
- 6) 池田重雄, 他: Paget 細胞 (特に CEA). 皮膚臨床, 28: 1119-1137, 1986.
- 7) 小林まさ子, 他: 腋窩 Paget 病の 1 例. 皮膚臨床, 32: 751-753.